

nichi-nichi



Autumn

「日々のこと」

みなさんはじめまして、こんにちは。

初めてじゃないみなさん、今日もこんにちは。

『日々（にちにち）』は、


想像力を大事にすることをモットーとした《ヨミモノ》です。

知っている人からすればあたりまえのこと、

知らない人からすれば絶好の想像のチャンス。

日々（ひび）の想像は、頭の中の小旅行。

あなたの少しの時間のお供になりますように。

 コダマ

「紅いカラス」

紅あかアガア、紅あかアガア

ぬば玉の子カラスの口の中は紅あ

あんまり自分が黒いので

秋を食べて紅あ紅あ

その罰この罰の喉の奥に

枯れ葉が詰まってガラガラ声

紅あかアガア、紅あかアガア

カラスの鳴き声はそういう訳よ



名字のはなし

おもしろい名字、珍しい名字から思いついたことを自由にかきます

二、大引

（オオビキ）

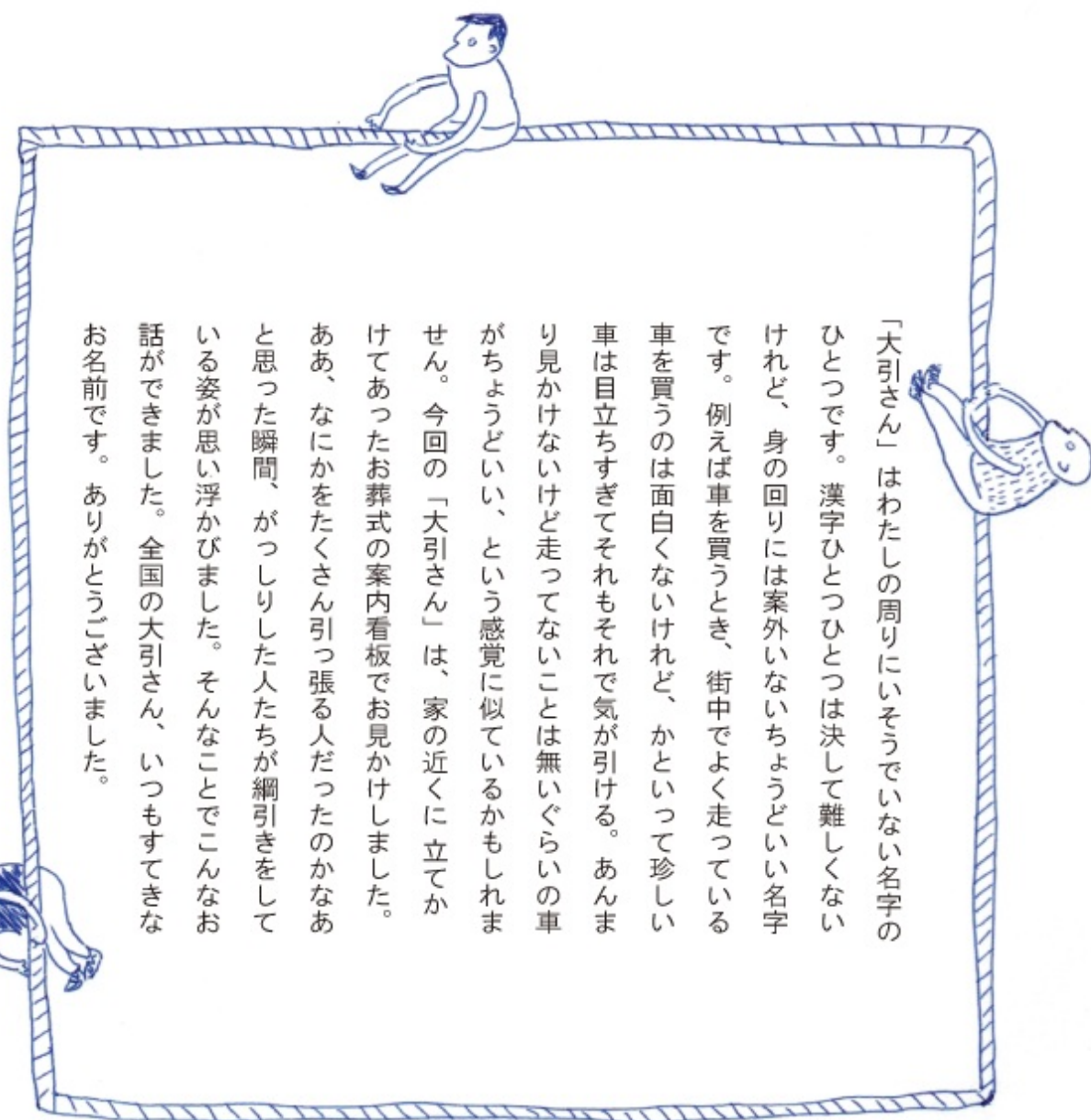
大引家葬式場

はあつという間に文字通りの黒い人ばかりで埋め尽くされた。下は二〇代から上は九〇代まで。男も女も日に焼けて、肌は黒くつやつやと光っている。それだけではない。皆、脚も腕も太く短く、肩はこんもりと丘のように盛り上がっていてレスリング選手のような体格だ。とりわけ手はごつごつとしてキャッチャーミットぐらい大きい。おかげで手首に通した白い数珠が、食べこぼした米粒のようにしか見えない。亡くなったのは若干はたちの青年で、名前を腰綱という。この大引家、古くから小さな村を二つにわけるように流れる泥川の西岸に住み、毎年秋になると綱引きの東西対岸決戦を行っている。どちらも代々綱引きの名家として栄えてきただけあって、この決戦には命を懸けている。村では綱引きの戦いで命を落とした者には名誉勲章が与えられ、村の英雄として岩壁に肖像が彫り刻まれる。腰綱君も四十九日が終わる頃には岩壁から村人を見守っていることだろう。ポンカポンカと木魚の音が鳴り響き、お経をあげる声がある。最近はお歌手だけでなくお坊さんまでカセットテープをこつそり流してロバクでお経をあげるらしいが、大丈夫、今日のお坊さんはちゃんと音痴だ。なんとなく親近感が湧いてきたので、わたしも参列者に紛れてお香をあげる。綱引きの要、アンカーマンとして活躍した彼の棺は通常の一・五倍程はある。その棺の中で腰綱君は誇らしげな笑みを浮かべて眠っている。ファーン、と長いクラクションの音が鳴り響き、英雄の棺が運び出される。親族は秋晴れの空の下で大きく大きく手を振って見送っていた。

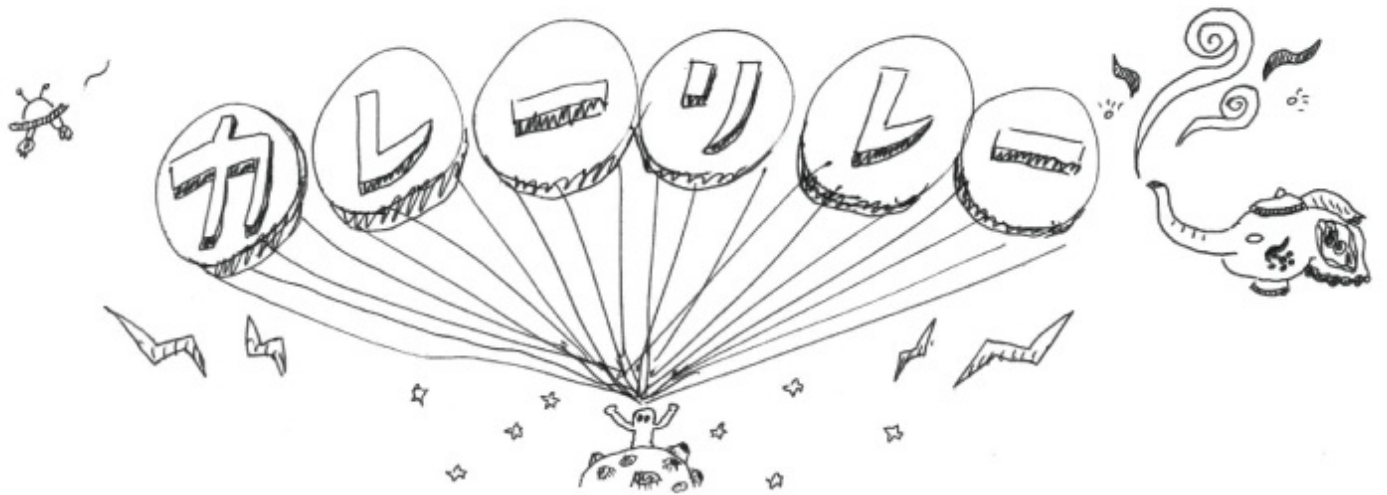


名字のはなし

のはなし



「大引さん」はわたしの周りにいそいでいない名字のひとつです。漢字ひとつひとつは決して難しくないけれど、身の回りには案外ないちようにいい名字です。例えば車を買うとき、街中でよく走っている車を買うのは面白くないけれど、かといって珍しい車は目立ちすぎてそれもそれで気が引ける。あんまり見かけないけど走ってないことは無いぐらいの車がちょうどいい、という感覚に似ているかもしれせん。今回の「大引さん」は、家の近くに立てかけてあったお葬式の案内看板で見かけしました。ああ、なにかをたくさん引く張る人だったのかなあと思った瞬間、がっしりした人たちが綱引きをしている姿が思い浮かびました。そんなことでこんなお話ができました。全国の大引さん、いつもすてきな名前です。ありがとうございます。



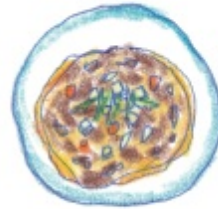
おいしいカレー屋さんが見つかるまでおいしいはず!
カレー屋さんを巡る旅の記録です



カレーリレーの地図



① Karahi curry (京都)
カラヒカレー



② GHAR (肥後橋) → ③ ガネーシュム (北浜)
ガル



谷口カレー



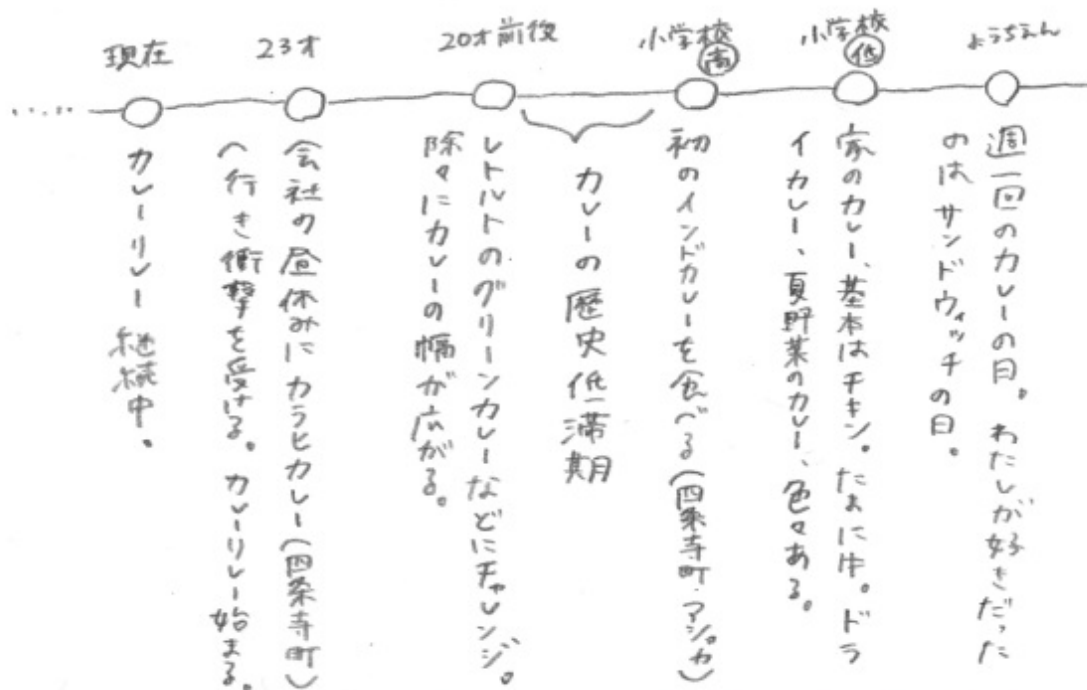
④ ガネーシュム (天神橋)



あれそれカレー



第一回 (コダマとカレーの歴史)



カレーリレーをしていると、当然「カレー、好きなんですか?」とよく聞かれます。ただ、特別カレーが好きなのかと聞かれると急に返事に困る。最後の晚餐にカレーを選ぶかというところがいいし、カレー配合がキシリトール配合のガムかどちらが良いかといわれると、普通にキシリトール配合の方が良いし……。でも、旅先、特に一人旅をしていると無性にカレーが食べたくなる。どんなに遠く、馴染みの無い場所で頼んでも、カレーの味はいつもカレーでなんだかほっとする。ひとくちにカレーといえども、その姿かたち、味はさまざまです。それなのに、口にした誰もがこれはカレーだと口を揃えて言う。あれもカレーならそれもカレー。それが不思議でおもしろい。自分の好きなカレーもあれば、苦手なカレーも勿論あります。物足りないと思うことだってあるし、逆に本格的すぎて舌がっついて行けないこともしばしば。個人店舗のディープなカレーばかり食べるかって? いやいや、ココ壹、ゴーゴーカレー、なんならスキー場のカレーだって好きです。なんのスパイスが入っているかなんかてんで分からないし、あそこのカレー屋はどうだとかカレー談義もろくにできない。いわゆる「カレー好き」の称号は到底もらえそうにありませんが、カレーに関するもろもろすべてひっくるめて、好きです、カレー。





西成の神様は二〇五センチ。
タビコの煙をよく見えない。



skoshi hanashi
すこしはなし
—Autumn—

「おいつちにーい、おいつちにーい。」

尾びれを右に、次は左に。

おいつちにーい、おいつちにーい。」

列を乱すな、命が危ない。」

池のどこからか大きなかけ声が聞こえる。時計を見ると午後一時。

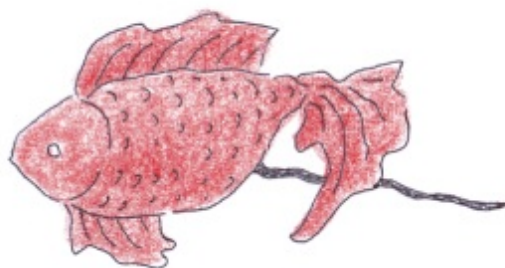
野生化した金魚軍団の、定時の巡回だろう。最近この池に鵜が出入りするようになってから臆病な金魚たちは急に軍隊じみて、朝から晩まで巡回だの演習だのやっている。私は元々鯉が嫌いだから、それに近い金魚もついでに好きではない。どんなにぶりっと太っていたって、食べようとも思わない。あのちまちました金魚を見ると、砂でもひっかけてやりたくなる。

「おいつちにーい、おいつちにーい・・・」

ああ、まったくやかましい。せつかくの昼寝が台無しだ。

金魚たちの一日はこうだ。

毎朝きつかり五時に起床し、まず準備運動をする。次に隊列を組む練習。前ならえ、右ならえ、左ならえ。組め、休め、まあそんな感じだ。それが終わるとやっと朝食。この時も隊列は崩さず、石ころにつ



いた苔を食べる時なんかは、一列ずつ固まって、見張りをつけて食べている。そんなことをしたって、食べられてしまうときは食べられてしまうもんだとも思うのだが、金魚たちもそれだけ必死なのだろう。鵜が現れたこの一週間で、一六〇匹余いた金魚たちは半数の八〇匹までに減ってしまっていた。

朝食の時間が済むと、またおいつちにーい、おいつちにーいのかけ声が始まる。食後の体操の時間だ。好き勝手に用を足して糞をうしろにくっつけて泳いでいるのでは目立ちすぎる。ああしてお互いに下っ腹を尾びれでさすりあって腸のぜんどう運動を盛んにし、同じタイミングで一斉に用を足してしまえるよう工夫をしているのだという。終わったあとは、うしろに糞がくっついたままになっていないかお互いにチェックし合い、細心の注意を払っている。金魚にお馴染みのあの光景は、この池では見られないという訳だ。全員のチェックが終わると、ここでやっと一五分間の休憩ができる。午後からは定時の巡回に加え、実戦演習やスイミー泳法の練習、鵜を撃退するための作戦会議などが日暮れまで続く。

「もうし、もうし。」

どこからか声が聞こえる。

「もうし、もうし、青サギ殿。こちらですよ、あなたが今立っている蓮の葉の下ですよ。」



見ると、赤い金魚五匹ばかりがこちらを見上げていた。立っているのは蓮ではなく睡蓮の葉の上であったが、私は紳士だ。いちいち訂正するのはやめておこう。

「青サギ殿、大変失礼だが今あなたが立っている蓮のまわりは、本日我々の演習拠点となっている。大変失礼だがどいて頂きたく候。」
やれやれ、ついに羽を休める場所まで奪われてしまった。この池の睡蓮は特別美しいので気に入っていたのに、無念である。今日はもうひとつ奥の池に移動するでしょう。

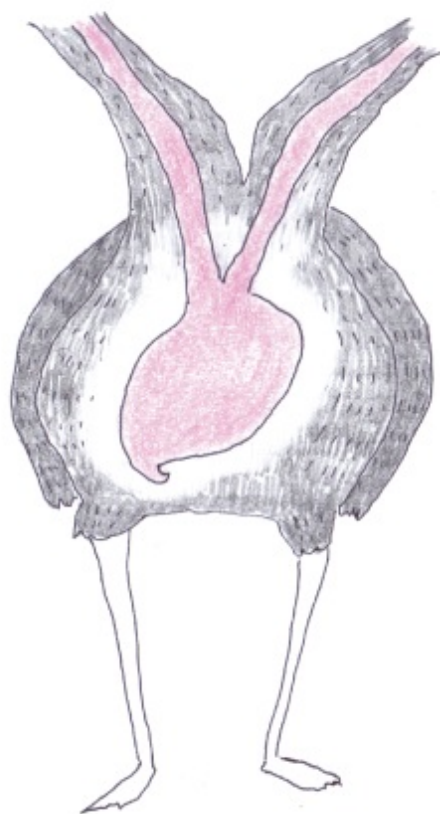
池に着くなり、背後になにか気配を感じた。水面から一瞬ぬっと黒いのが見えたかと思うとすぐに見えなくなり、別のところからぬっと出てきたかと思うと、またすぐに消えてしまった。少し苛立ちながら誰だね、と尋ねると、『俺だよ俺。』とからかうようにどこからか声が返ってくる。こんなことするのは、きつとあいつに違いない。

「これはこれは、青サギ殿。あんたがこんな不風流な池に来るなんて珍しいねえ。」

やっぱり鶉だ。私がこの池に来る羽目になった元凶でもある。

「なに、あんたも馬鹿な金魚どもの巻き添えを喰らったのかい？
あいつら最近いそがしいからねえ。」

鶉は岩の上に立ち、にやにやしなから濡れた羽を小刻みに震わせて



乾かしている。

「あんた、俺を疑ってるようだが金魚を襲ったのは俺じゃあないぜ。俺の双子の兄さんだよ。恨むなら兄さんを恨んでくれ。」

そうやってその、弟は首を横に傾けた。胴体はひとつで変わりないが、さっきまで一本に見えていた鶉の首はいつの間にか二本に増え、同じような顔が二つこちらを見てにやにやしている。

「おいおい、青サギ殿。そんな化け物を見たような顔をするなんて失礼じゃないか。見たことないかい？ひとつの胴体に二つの頭、俺たちは結合双生児なのさ。」

「ああ、だが金魚を喰ったのは俺だけじゃないぜ。弟も俺と一緒にやって喰ってたさ。なあ？」

「兄さん程じゃないさ。そう思うだろ、青サギ殿？」

「別々に食べたところで、どうせ同じひとつの胃袋に収まるんだから、どっちが喰おうが一緒だろうよ。なあ、青サギ殿？」

二羽、いや、この一羽の兄弟は終始他の者を小馬鹿にするような態度である。金魚を喰らうのだって、生きるためでなく道楽のためにやっているのだ。だんだん金魚たちが不憫で、腹立たしくなってきた。しばらくだまって話を聞いていたが、鶉の兄弟にあることを提案することに決めた。私は軽く咳払いをして、そしてこう言うのだ。



「しばらくだまって聞いておりましたが、あなた方ご兄弟は大変に損をしていらっしやるようだ。」

こんな風によれば、きっとこの兄弟は喰いついてくるのだ。

「俺たちが損をしているだって？そいつぁどういふことだ？」

思ったとおり、兄弟揃って喰いついてきた。

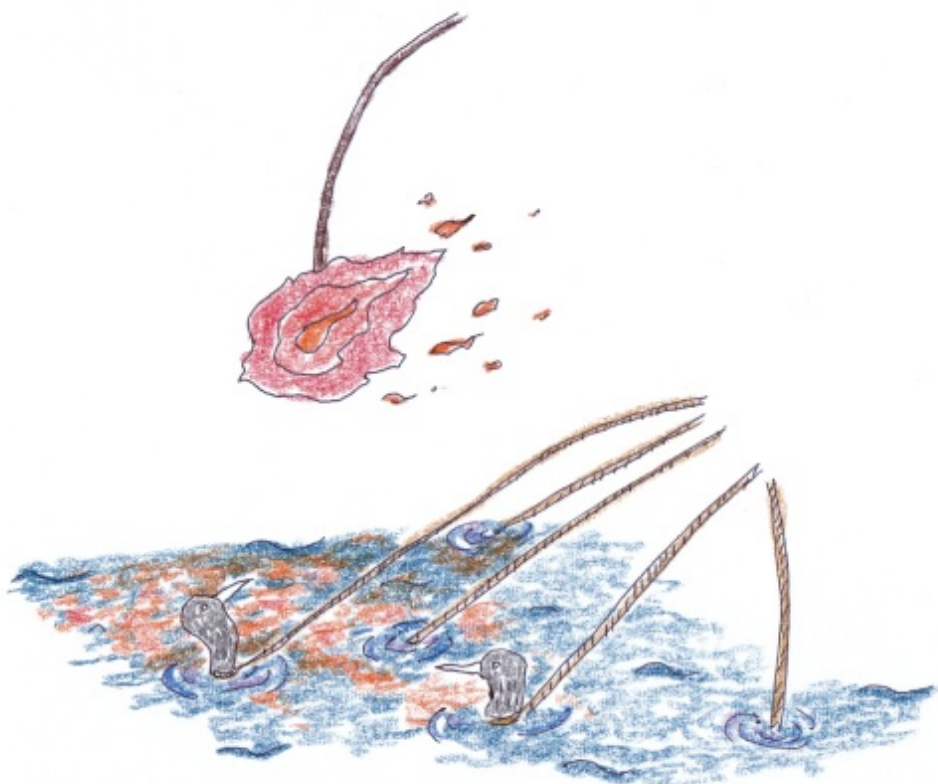
「あなた方みたいに遊びを知っている方が金魚ごときを相手にしているなんてもったいない。金魚を獲るより面白くて、まだ誰もやっていない遊びがあるのですよ。」

「誰もやっていない遊びだって？まあ確かに、とうに金魚遊びには飽きてきていて、ちょうど別の遊びを探していたところだ。なあ兄さん？」

「ああその通り。金魚なんてただの暇つぶしさ。遊びでもなんでもない。」

「それであんたは俺たちと違って風流鳥という訳だ。さぞかしたくさんの遊びをやってきたとみえるが、一体他にどんな遊びを教えてくださいというんだい。」

兄弟たちは早く答えが知りたくてうずうずし、とうとう汗までかきだした。あんまり焦らすのはかえって逆効果だろう。静かに深呼吸をしてこう切り出す。



「鶺飼い」というのをご存知ですか？あなたの方のような鶺の中には、人間に飼い馴らされているものがあります。そのような鶺が魚を獲るのを、人間は喜んで金を払って見るのです。鶺も野生の心を忘れてもうすっかり鶺飼いの鶺になっていきますから、喜ぶ観客や鶺使いの主人の為に魚を獲ることを、大変な名誉に思っております。」

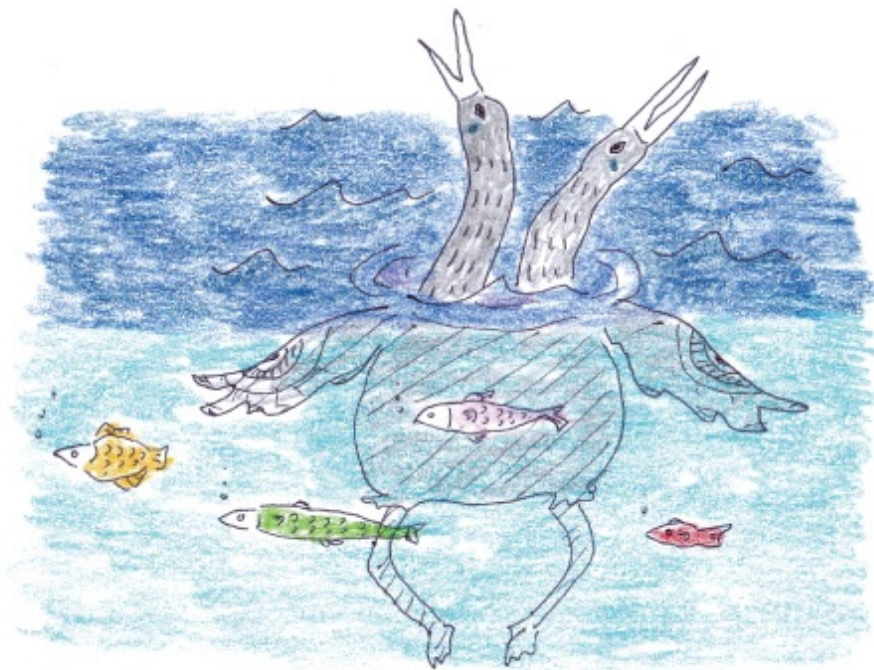
「おいおい、青サギ殿。まさか俺たちに鶺飼いの鶺になれってえのか？」

「首に縄を括りつけられて、自分で喰えもしない魚を獲るなんてまっぴら御免だぜ。」

兄弟の語気は荒く、目はうっすらと血走ってきている。今、少しでも隙を見せれば、私の首元に飛びかかってきそうだ。

「いえいえ、何をおっしゃる。もちろんそうではありませんよ。あなた方は鶺飼いをしている横で自由に動き回って、鶺飼いの鶺より先に魚を一匹残らず獲ってしまえばいいのです。そうすればどうです、鶺飼いの鶺は獲る魚がないので、おもちゃのあひるのようにぶかぶか川面を浮くしかないわ・・・」

「おうおう、そういうことか。金を払って観に来た観客は興ざめるわ、鶺使いたちは面目丸つぶれだわの大騒ぎ。俺たち兄弟の悪名が世に知れ渡るって訳だ。なあ、兄さん。」



「おうおう、それはおもしろえ。さすが青サギ殿。あんたはどうやら遊びの才能があるらしい。」

そうして兄弟は勇み飛び立って、一足早く川へ向かった。棧橋には六隻程の屋形船が停まり、客に振舞う弁当が大急ぎで運び込まれている。目に見えるスピートでだんだんと日は沈み、かがり火を垂らした鶺鴒の小舟がゆっくりと動き出した。屋形船の上の客はもうすっかりご機嫌なようだ。笑い声やちやかちやかと鳴る箸の音がにぎやかである。兄弟は鶺鴒の鶺鴒の間を縫うように泳ぎ回り、彼らの獲ろうとした魚を次から次へと呑み込んだ。こうなったら兄弟の目論みどおり、鶺鴒はぶかぶか、客は興ざめ、鶺鴒使いは面目丸つぶれの地獄絵図。ところがどうだ、さっきまで意気揚々と泳いでいた兄弟のようすがおかしい。ぐつしより濡れて重くなった羽をばたつかせ、兄弟揃って必死になって水面から顔だけを突き出している。あんまり調子に乗って魚を呑み込んだせいで漬物石のように重くなった体に、さらに長時間の潜水で水を吸った羽が追い討ちをかけ、どうにもこうにも水面に浮き上がることができなくなっていたのだ。数分と経たぬうちに兄弟の姿は見えなくなり、とうとう川の中へ沈んでしまった。

兄弟の一部始終を聞いた池の金魚たちは大いに喜び、軍事演習などとは無縁の、もとの平和な生活に戻った。金魚に巻き込まれた私もま



たもとの平和な生活に戻り、池に咲く色とりどりの睡蓮をゆつくりと心ゆくまで眺めることができるようになった。

風の噂によれば、あのあと鵜の兄弟は心優しい鵜使いに助けられ、それからはすっかり心を入れ替え、助けてもらった鵜使いの為に鵜飼いの鵜として一生懸命働いているという。そういえば先日、二つ頭の兄弟鵜と銘打った鵜飼いの張り紙を見かけた。きっとあの兄弟のことだろう、既に満員御礼となっていた。そこまで私が企んだかつて？今となってはもう分からないことですよ。

ふたつ頭の兄弟鵜あとがき

気がつく、鳥が出てくる物語を書いています。生活に身近な鳥は、住んでいる場所や生活スタイルによってそれぞれ違うと思いますが、わたしの場合すぐ思いつくのはトンビにカラス、カモにハト、そしてサギです。この鳥たちに関して は散々観察してきたので、それぞれの見た目や動きの特徴なんかはそれなりに説明できると思います。

んで別の場所から顔を出す。離陸の為の助走には長い距離が必要で、水面をバタバタと不恰好に走る。横顔はなんとなく恐竜っぽい。こうした日々の観察が私の物語のモチーフとなり、観察しきれない未知のものが、わたしを想像世界へと送り込みます。

今回の物語には金魚に青サギ、そしてわたしの生活にあまり身近でなかった鵜《ウ》が出てきます。父方の祖父母が岐阜に住んでおり、長良川の鵜飼いは舟で観たこともありま す。ただ、普段の生活では目にするには無かったですし、 まだ観察したことのない鳥でした。そんな鵜《ウ》がここ最近になって職場の池に現れるようになり、急に身近になりました。池に来る鵜《ウ》は他にすみかがあるのでしょうか、あまり長く池に留まりはしません。せいぜい二、三〇分くらいです。首を前後に揺らして泳ぎ、すつと潜ったかと思うとて

わたしはたくさん物語を書きますが、何か伝えたいことがあつて書くことはありません。モチーフだっていつも向こうからやって来ますし、不思議なことに、自分でも最後まで物語の終着点は見えてきません。自分の想像力に散々振り回されて、ああそうなるのか、と終わりのほうになってやっと分かるのです。そんなことで、『ふたつあたまの兄弟鵜』が完成しました。

end



2016 Autumn号

イラスト&文：コダマ

mail : codama235@gmail.com